

平城京左京三條二坊六坪
発掘調査概報

1980年3月
奈良市教育委員会

目 次

I 序 章

| | |
|---------|---|
| 1 調査の経過 | 1 |
| 2 調査の概要 | 2 |

II 遺 構

III 遺 物

| | |
|-----------|---|
| 1 木 簡 | 4 |
| 2 土 器 | 6 |
| 3 瓦 | 8 |
| 4 木製品・石製品 | 9 |

IV ま と め

挿 図・表

| | | | |
|------------------|---|-----------------|----|
| 第1図 調査区位置図 | 1 | 第5図 土器実測図 | 7 |
| 2 発掘遺構図 | 3 | 6 軒瓦拓本 | 8 |
| 3 導水路SD1525土層断面図 | 3 | 7 木製品・石製品実測図 | 9 |
| 4 SD1545出土土馬実測図 | 6 | 8 左京三条二坊六坪発掘遺構図 | 10 |
| 第1表 出土軒瓦一覧表 | 8 | | |

図 版

| | |
|-----------------|----|
| 図版1 昭和54年度調査区全景 | 11 |
| 2 導水路・旧河川・建物 | 12 |
| 3 昭和52年度調査区全景 | 13 |
| 4 建 物 | 14 |
| 5 土 器 | 15 |
| 6 木 簡 | 16 |
| 7 木 簡 | 17 |
| 8 木製品・石製品 | 18 |

例 言

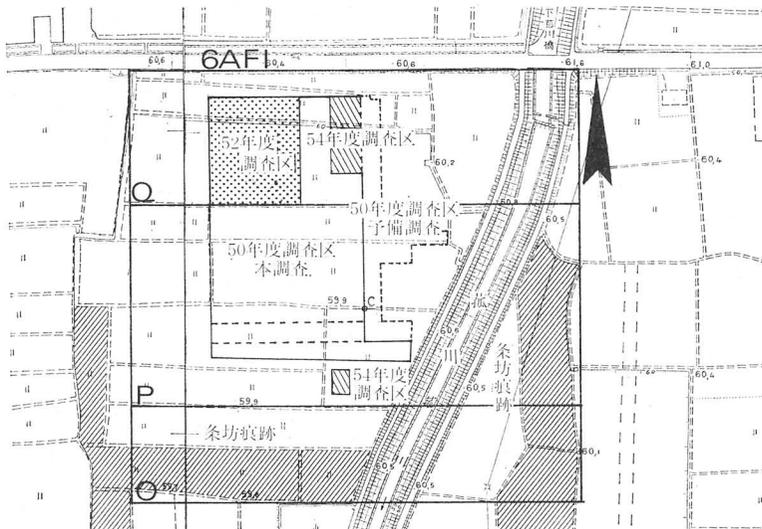
1. この概報は、奈良市教育委員会が昭和55年1月9日から2月4日にかけて実施した奈良市市民文化センター建設予定地の事前調査にもとづく発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、奈良市が奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部に依頼して実施した。発掘調査には、鬼頭清明、山本忠尚、中村雅治、光谷拓実、巽淳一郎、上原真人が参加した。
3. 報告書の作製は、調査員全体の討議のもとに以下のように分担執筆した。
Ⅰ－1・Ⅳ 光谷拓実、Ⅰ－2 安田龍太郎、Ⅱ 巽淳一郎、Ⅲ－1 鬼頭清明、Ⅲ－2 田辺征夫・鬼頭清明（墨書土器）、Ⅲ－3 山本忠尚、Ⅲ－4 上原真人
4. 遺構・遺物写真は、佃幹雄が担当し、航空写真の撮影はアジア航測株式会社があたった。
5. 本書は、狩野久（前平城宮跡発掘調査部部长、現飛鳥藤原宮跡発掘調査部部长）と岡田英男（平城宮跡発掘調査部部长）の指導のもとに光谷拓実が編集した。
6. 当該発掘調査地については過去3度の調査があり、それらは『平城京左京三條二坊六坪調査概報』(1976.3)、『奈良国立文化財研究所年報』(1978.3)、『平城宮跡発掘調査概報』(1978.3)として公刊している。

I 序 章

1 調査の経過

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部は、昭和50年度に、平城京左京三条二坊六坪にあたる奈良郵便局庁舎移転計画用地（奈良市尼ヶ辻ゴドザ甲669-1）において近畿郵政局の依頼によって、予備調査と本調査を行った。昭和50年5月30日から7月9日までの予備調査（発掘面積：800㎡）では敷地中央東寄りで園池の一部を検出し、また園池に伴う塀、及び旧河川跡、西方では数棟の掘立柱建物を検出した。さらに、園池の全容、坪内の建物配置等を明らかにするため、昭和50年10月13日から12月23日にわたる本調査（発掘面積：3,600㎡）を行った。その結果、六坪の中心に大規模な園池が完全な形で検出され、また、この園池と併存する建物・塀・溝・井戸・導水路なども検出され、坪内の様子が明確になった。

奈良国立文化財研究所は、文化庁の指示に基づき、この遺跡の重要性を考え、昭和52年11月21日から12月27日にかけて昭和50年度調査区の北西に接続する未発掘地の調査（発掘面積：1,100㎡）を行った。以上3度にわたる調査結果から六坪内の遺跡が学術的にも大変価値の高いことが分り、文化庁では昭和53年10月27日に移転計画用地全域を特別史跡に指定した。奈良市はこの土地を国庫補助のもとに買い上げ、この遺跡の保存、活用を計る目的で、史跡指定地内の北半部に奈良市市民文化センター建設を計画し実行する運びとなった。これら一連の工事に際して一部未発掘地が残っていたため、平城宮跡発掘調査部では、奈良市教育委員会の委託を受けて、昭和55年1月9日～2月4日まで現状変更に基づく発掘調査（発掘面積：500㎡）を行った。本書は、この調査結果の報告である。昭和50年度の調査結果は、『平城京左京 三条二坊六坪発掘調査概報』（奈良国立文化財研究所・昭和51年）として報告済みである。昭和52年度の調査結果については、I-2で簡単に述べ、遺物についても再録した。



第1図 調査区位置図

2 調査の概要

昭和52年度の調査は、昭和50年度調査区の北西部にあたり、掘立柱建物5棟・溝2条・井戸2基・土壌などの遺構が検出された。遺構は、昭和50年度調査と同様A期(A-1期・A-2期)、B期の変遷がある。A-1期は、南廂をもつ東西棟建物(SB1573)、東北には東西棟建物(SB1570・SB1571)が2棟並び、その東南には南北棟建物(SB1552-A)が建てられる。A-2期は、SB1552が建て替えられ、内部に棚状施設がつくられる。B期には、A期の建物がこわされ、東西棟建物(SB1574)がつくられる。出土遺物には瓦類、土器類、石製品がある。瓦類では藤原宮式を含め、平城宮瓦編年のI~IV期までであり、いずれも平城宮出土瓦と同範である。土器類は坪の北を限る築地南側雨落溝(SD1545)から多くの土師器・須恵器の他、土馬も出土した。石製品には将棋駒形をしたものがある。

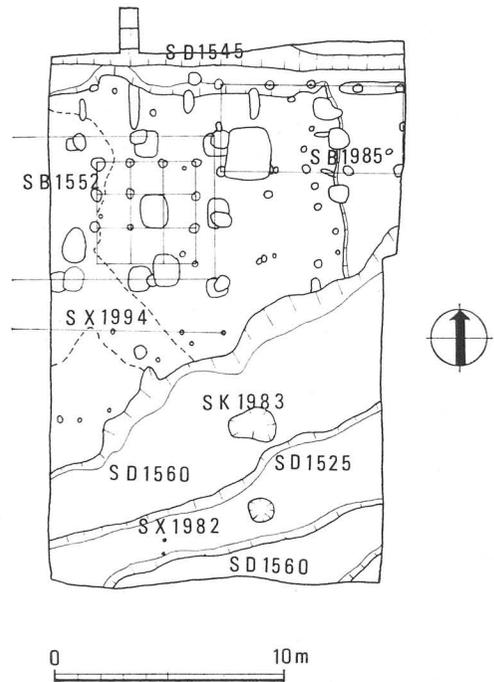
昭和50・52年度の調査で、六坪の約35%が調査されたことになる。六坪の全体的な構成・性格についてこれまでに明らかになった坪内の利用状況は次のようである。**A-1期** 坪の中心に園池SG1504がつくられる。この園池を囲む塀SA1500・SA1473によって坪は南北に140尺で三等分される。仮にこれを南区、中区、北区と呼ぶと、中区では園池の西方にSB1542・SB1510が建てられ、北区ではSB1570・SB1571を中心にSB1573・SB1552-Aがつくられる。この時期の建物・塀の配置は、坪の中心から10尺単位の数値で割りつけられる。**A-2期** 園池の北を画するSA1500が東に柱間寸法7尺で延長され、南北塀SA1455と接続する。中区では、園池のすぐ西側に園池観賞用の建物と思われるSB1505・SB1470が新たにつくられる。これらの位置は、坪中心から7尺単位の数値で割りつけられる。北区では、SB1552が建て替えられ、内部に棚状施設がつくられる。**B期** A期の建物はすべて取払われ、大規模な改作が行われる時期である。SA1500は存続し、北区と中区とは依然区画されている。中区では礎石建物SB1540が中心建物で、園池際にSB1471・SB1472が並んでつくられる。北区ではSB1574がSB1540と柱筋を揃えて建てられ、東北にはSB1550がつくられる。この時期の建物配置は、坪中心から7尺単位の数値で割りつけられている。

このように各時期の建物配置をみると、未調査の南区を除いて、中区、北区では両地区が一体となった建て替えが行われている。そして六坪利用にあたっては、まず140尺を単位とした大きな区画割りをし、建物配置はA-1期では坪中心からの距離が10尺、A-2期・B期では7尺を単位とした割りつけが行われている。また、東西塀によって区画される中区と北区の性格は、中区が園池を中心とし、公的な宴遊の施設であるのに対して、北区は六坪所有者の家政機関で、園池の管理・運営が行われていたとみられる。以上のように六坪の利用状況がかなり明確となり、平城京の復原に貴重な資料を提供することとなった。

今回の昭和54年度調査では2ヶ所の発掘区を設けた。1ヶ所は昭和50年度の子備調査区と本調査区に囲まれた未調査区で、1ヶ所は50年度調査区の南端に設けた小トレンチである。この小トレンチでは奈良時代の明確な遺構は検出されず、本書では説明を省くこととした。

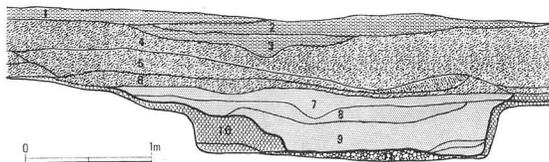
II 検出遺構

今回の調査で検出した遺構は、掘立柱建物2棟・塀1条・溝3条・土壌3基・性格不明のSX1990等がある。SB1552は桁行2間分と妻柱列を検出し、昭和52年度調査分と合せて2×7間でおさまる東西棟になった。桁行・梁間とともに10尺(3.0m)等間で、屋内に棚状施設を持ち倉庫的な建物と考えられる。従前の調査ではSB1552はほぼ同じ場所で建て替えられているとされていたが、今回の調査で重複する一方の穴は柱抜取穴である事を確認した。SB1985は2×4間の小規模な東西棟で径約10cm程度の柱根が残る。桁行・梁間とともに7尺(2.1m)等間。SB1985はSB1552の柱抜取穴・SD1545を切り掘形が掘られており、年代的には6坪の廃絶に近い時期に比定されよう。SB1552の南2.1mにあるSX1994はSB1552の足場穴あるいは目隠塀と考えられる。SD1545は素掘りの南北溝で3条条間路と6坪を画す築地の南雨落溝に想定され、巾約2.1m、深さ0.6mで底が一段深く掘られている。SD1545の埋土は3層あり、最上層は炭を多量に含む暗灰褐砂質土で奈良時代末の土師器・土馬が多量に出土した。下位の2層は遺物は少ない。SD1525の南岸には橋の据え付け痕跡とも考えられる3条の溝状遺構がある。導水路SD1525は旧河川SD1560の流路をそのまま利用した形で、その堆積を切って掘られている。巾約2.5m、深さ0.4mで3層に分かれ、第8・9層から木簡38点が出土した。プール状遺構にとり付く近くには、杭が2本打ち込まれている。旧河川SD1560は巾約12mで堆積土から布留式土師器が出土した。導水路が機能している期間には旧河川の浸食作用で形成された崖面・氾濫原は埋められずにそのままの形を留めていた事も明らかになった。その他、SD1525の北岸の小土壌SK1983から「侍従」の墨書土器が出土している。



第2図 発掘遺構図

H=60.0m



第3図 導水路SD1525土層断面図

- | | |
|---------|----------|
| ① 床土 | ⑦ 暗灰砂質粘土 |
| ② 明茶褐土 | ⑧ 灰緑砂質土 |
| ③ 灰褐砂質土 | ⑨ 灰黒粘土 |
| ④ 茶褐粘土 | ⑩ 灰緑砂質土 |
| ⑤ 灰褐粘土 | ⑪ 砂礫 |
| ⑥ 黒褐粘土 | |

III 遺 物

1 木 簡 (図版6・7)

昭和54年度調査では、木簡はすべて導水路S D1525から出土した。木簡の出土点数は合計38点である。導水路の堆積は上下3層にわかれるが、木簡の38点は下2層から出土した。なお1975年の調査でもこの層から木簡が96点出土している。今回は、年紀をもつものは和銅5年のもの一点であるが、1975年には和銅5年、7年のものがあり、木簡の記された年代もほぼ同年代のもので、一括して導水路に投棄されたものと思われる。内容的にも北宮と記したものが前回同様出土している。おそらく一括した史料として検討されるべき木簡と考えられる。(1975年出土分は奈良国立文化財研究所『平城左京三條二坊六坪発掘調査概報』に収録)。以下、今回出土の主な木簡の積文をかかげる。積文末尾の数字は木簡の寸法(長さ×幅×厚さ 単位はmm 括弧を付したものは破損により原寸法不明のもの)と形態分類記号(『奈良国立文化財研究所平城宮木簡二解説』1975参照)である。

受稻^(積)□

1 ・ 竹野王子大許進米三升

・ 六日百嶋 183×23×9 6011

竹野王子のもとに米三升を進上したことを記した文書木簡、「受稻積」とあるのは米三升を直接受けとって竹野王子のもとに稲積がとどけたことを示すか。裏面の日付と人名「百嶋」は米の進上した日とその担当者を示す。大許の大は御に通ずるものか。竹野王子は天平勝宝三年四月の年紀をもつ石塔(明日香村竜安寺蔵)の建立者と同一人物ではないかと思われる。銘文には、従二位竹野王とある(『寧楽遺文』972頁)。また『一代要記』、『公卿補任』にもみえ、聖武天皇代に非参議であったとする。

2 ・ 四月十四日記若□進米二升

・ □ 185×18×4 6011

米を進上したことを示す文書

3 田官里俵 (142)×19×2 6039

俵とあるところからみて穀物の貢進付札か。田官里は『倭名鈔』等他の史料にみえない。

4 ・ 北宮御物俵□

・ 阿須波里□ (87)×23×4 6039

北宮へ貢進する穀物についていた荷札。阿須波里は『倭名鈔』では越前国足羽郡、越後国沼垂

郡にみえる。北宮は文武天皇の妹、吉備内親王の居所かといわれている。これと同じ類の木簡は1975年にも出土し、「北宮俵□」「鴨郡」と記している。どちらも阿須波里、鴨郡から北宮への貢進付札であるが、いわゆる調庸や春米の付札とはまったく書式をことにし、国名を欠いていること、宛先を北宮と限定していることが注目される。後者の点からは、あるいは封戸などとの関連も推察される。

- 5 ・ 遠江国石田郡□□□万呂
 ・ 五斗 (122)×17×5 6033

- 6 □□入奈加良進出御帳□辛積 (124)×29×3 6081
 御帳と辛積などを支給したことを記す文書。奈加良は万葉仮名。上下折損。

- 7 ・ 和銅三年四月十四日阿刀
 ・ 部志祁太女春米 (109)×20×3 6039
 米についた付札。年紀を先に書いているのは、藤原宮出土木簡に多く、大宝三年以前にかぎられていた。したがって、この木簡は同型式の最も新しい例である。下端は二次的切断か。

- 8 ・ 賣斐□ (52)×(24)×2 6081
 ・ 止為故長
 止は万葉仮名。上端は調整されており、文書木簡の冒頭部分か。

- 9 □□後又意富□□^(里カ) (197)×24×5 6081
 意富里は『倭名鈔』では、下野国安蘇郡、下総国相馬郡に意部郷がみえ、常陸国行方郡に大生郷がみえる。

- 10 ・ 従二升□□一升□□長四升半
 ・ 右一斗三升□ 四月廿三日 □末呂 (261)×(44)×4 6019
 米の支給を記した帳簿風の文書、従は従者の意味か。右一斗三升は従者たちに支給した米の総計か。□末呂は支給の責任者。

- 11 □□□針萬呂 (109)×(16)×4 6081

- 12 ・ □□□□□
 ・ □濱 (113)×(13)×9 6081

2 土 器 (第4図・第5図、図版5)

昭和52・54年度調査では、導水路SD1525、東西溝SD1545、井戸SE1611、土壌SK1983の各遺構と整地層中から土師器・須恵器が出土した。遺物の年代は、奈良時代の前半から終りまでの各時期にわたっている。

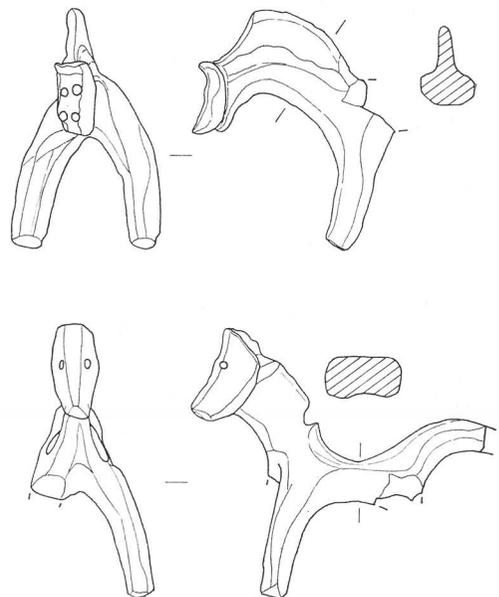
SD1525 出土の土器 土師器の杯(2)・皿(4)・高杯・鍋(8)・甕(9)と須恵器の杯・蓋・壺・甕がある。土師器の残存状況はよくなく、手法の観察はむずかしいが、杯皿類では暗文をもつものが多い。鍋は、口径32cm、高14.2cmで、1対の把手がつく。口縁部内外面はヨコナデを施し、体部内面は強くナデで外面はハケ目調整を施している。甕は、口径13.8cm、高12cmの小形の完形品で、口縁部は内外面ともヨコナデを施し、体部内面は強いナデ、外面はハケ目調整である。底に径約1cmの小孔が焼成後に穿たれているが、その用途についてはわからない。この溝出土の土器の年代は奈良時代の前半である。

SD1545 上層出土の土器 土師器の杯(1)・皿・高杯・甕、須恵器の杯(12)・蓋・壺(19)・甕である。土師器の方が多いが、保存状況はよくない。壺は、ほぼ完形の四耳壺である。口径17.2cm、高26.4cmあり、肩に4つの把手をもつ。口縁部内外面と体部内面はロクロナデを施し、体部外面は叩き板圧痕、底部外面はケズリを施している。この溝の出土土器は、SD1525のような年代的なまとまりはなく各時期にわたっている。下層の土器は少量であった。

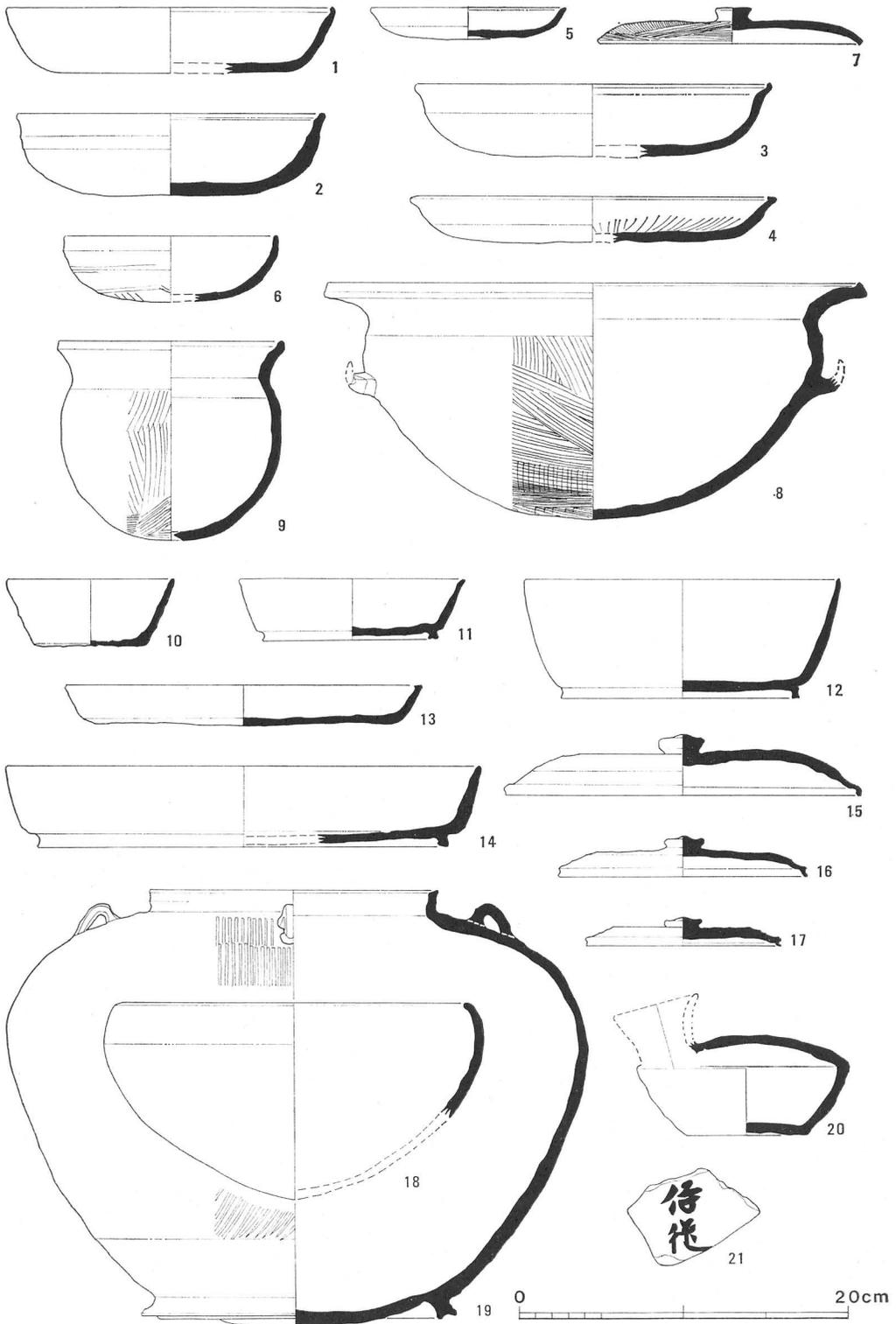
この他にSE1611からも少量の土器が出土している(14)。また、導水路をおおう整地層中からは、土師器の杯(3)・皿(5)・碗(6)・蓋(7)・甕、須恵器の杯(10・11)・皿(13)・蓋(15~17)・鉢(18)・平瓶(20)が出土している。

墨書土器 SK1983から須恵器杯蓋の頂部に「侍従」と記したものが1点出土した。侍従は養老令(令義解)職員令中務省条によれば中務省に所属し、天皇に常に近侍することを職務とした。前回の調査ではSD1517から「中務省少録」と記した木簡が出土しており、それと関連して注目される。中務省やそれに属する侍従との関連を示す遺物が出土していることは、この宮跡庭園が公的性格をもち、特に天皇との密接な関連をもったものであったことをしのばせる。**土馬** 東西溝上層から30個体以上の土馬がまとまって出土した。たてがみをはっきりあらわしているもの(上)とたてがみのないもの(下)の2種類がある。

この他下層の旧河川埋土中から布留式の小型壺の完成品をはじめ少量の土器が出土した。



第4図 SD1545出土土馬実測図



第5図 土器実測図

3 瓦（第6図）

昭和52・54年度調査によって出土した軒瓦は、軒丸瓦7型式20点、軒平瓦6型式27点であり、ほかに面戸瓦が1点ある。

各々のうちわけは表1のとおりである。

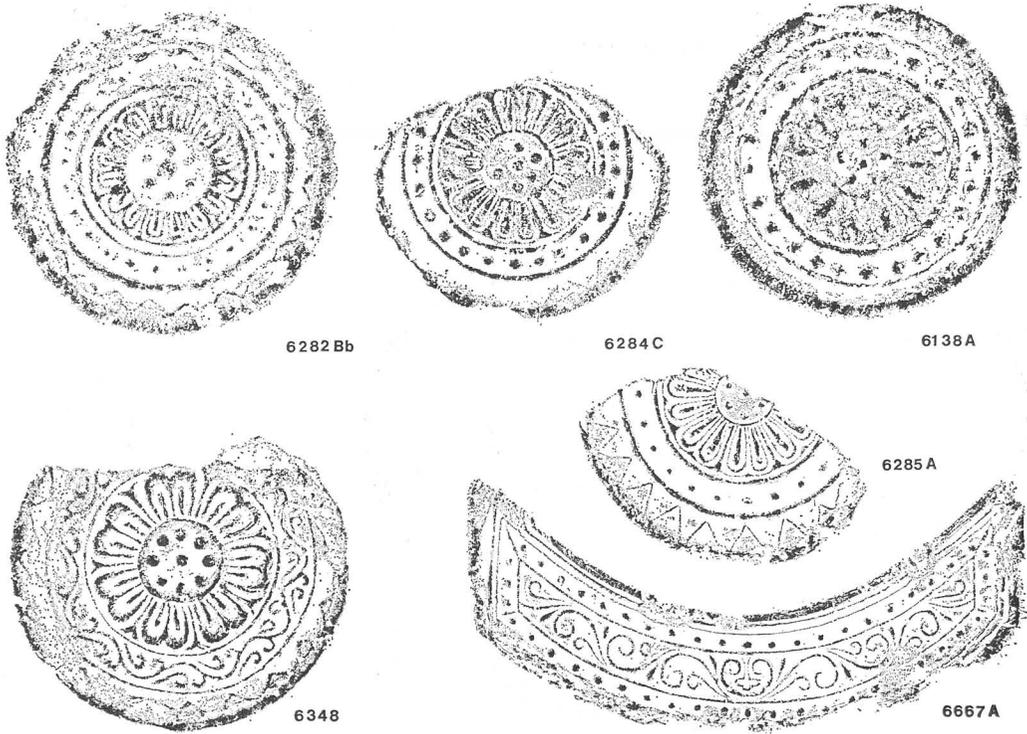
総数47点の軒瓦のほとんどすべては、平城宮と同範であり、平城宮出土軒瓦編年のⅠ期からⅣ期までを含む（『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ 瓦編2 解説』1975参照）。出土点数が比較的多いのは軒丸瓦6282B・6285A、軒平瓦6667A・6721の4型式であるが、平城宮の例から6285A—6667Aと6282B—6721の組み合わせが考えられる。前者は平城宮Ⅱ期（養老5年～天平17年）、後者はⅢ期（天平17年～天平勝宝年間）に比定できる。なお、6285A—6667Aの組み合わせは昭和52年度調査に比較的多く、一方の6282B—6721の組み合わせは昭和54年度調査に多い。

また、藤原宮式6276型式が3点、6641型式が2点出土している。

以上から、軒瓦に関しては、前回調査時の知見、すなわちこの左京三条二坊六坪の遺構は貴族の私邸と考えるよりも平城宮に関連した公的施設の要素が濃く、しかも京造営当初から存在した可能性が強いとした見解は、ますます強固になったと言えよう。

| | 型式番号 | 109次 | 121次 | 小計 |
|-------------|-------|------|------|----|
| 軒丸瓦 (20) | 6138A | 1 | | 1 |
| | 6235 | 1 | | 1 |
| | 6279 | 2 | 1 | 3 |
| | 6282B | 1 | 4 | 5 |
| | 6284C | 1 | | 1 |
| | 6285A | 3 | 1 | 4 |
| | 6348 | 1 | | 1 |
| 軒平瓦 (27) | 不明 | 3 | 1 | 4 |
| | 6641C | 2 | | 2 |
| | 6663F | 3 | | 3 |
| | 6667A | 4 | 8 | 12 |
| | 6671 | 2 | | 2 |
| | 6675A | 1 | | 1 |
| | 6721 | | 5 | 5 |
| 不明 | 1 | 1 | 2 | |

第1表 出土軒瓦一覧表

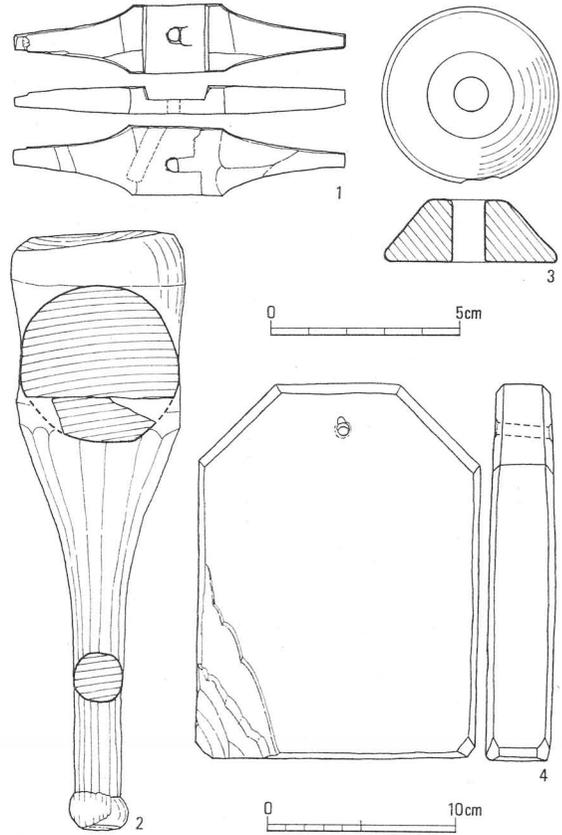


第6図 軒瓦拓本（縮尺4分の1）

4 木製品・石製品（第7図）

木製品は導水路S D1525旧河川S D1560から出土した。糸巻1は横木で板目材の両端を削り細め、中央に相欠きの仕口を作り、軸木を通す孔を開けている（S D1525出土）。全長8.3cm、幅1.8cmで、昭和50年度の本調査でも同じ導水路から同形同大の製品が出土した。横槌2は割り材を用い、身部から次第に細めて柄部を削りだし、柄頭は太く削り残す（S D1560出土）。全長31.8cmで、使用痕が身部側周囲に残る。

石製品は旧河川S D1560とS D1545から出土した。滑石製紡錘車3は径4.7cm・厚さ1.7cmである（S D1560出土）。滑石製品4は用途不明である（S D1545出土）。全長20.0cm、幅14.8cm、厚さ3.5cmの将棋駒形をなし、周囲を面取りしている。頂部に開けた径0.6cmの孔には紐で懸垂した痕跡がある。重さは現状で2296gである。



第7図 木製品・石製品実測図

IV ま と め

平城京左京三条二坊六坪の調査は、今回を含めて4度に及び、その発掘面積は約6000㎡となり坪内の約40%を占める。遺構は、坪の中心に南北に屈曲する平均幅15m、延長55mもの大規模な園池を中心に、一定の数値をもって計画的に配置された2時期の変遷をもつ建物・塀などが検出された。園池とこの西方に位置する一連の建物群については、「曲水宴」などを行うにふさわしい公的な宴遊空間として、また園池北方は、庭園施設の管理・運営にあたる家政的な機能をもつ空間として利用されていたことが明確となった。

この遺跡は、従来から不明であった奈良時代の庭園の全貌を細部にわたって明らかにすると同時に、園池を中心とした坪内の地割り等の利用状況を知る上に格好の資料を提供し、更に木簡等の遺物からこの遺跡が、平城宮と密接な関係をもつ公的な場所であることが分った。

この遺跡の重要さから六坪内の一部ではあるが特別史跡に指定されたことの意義は大であり、今後も京内における事前発掘調査の必要性和これに対する十分な調査体制が強く望まれる。



昭和54年度調査区全景



導水路 S D1525・旧河川1560 (西南から)



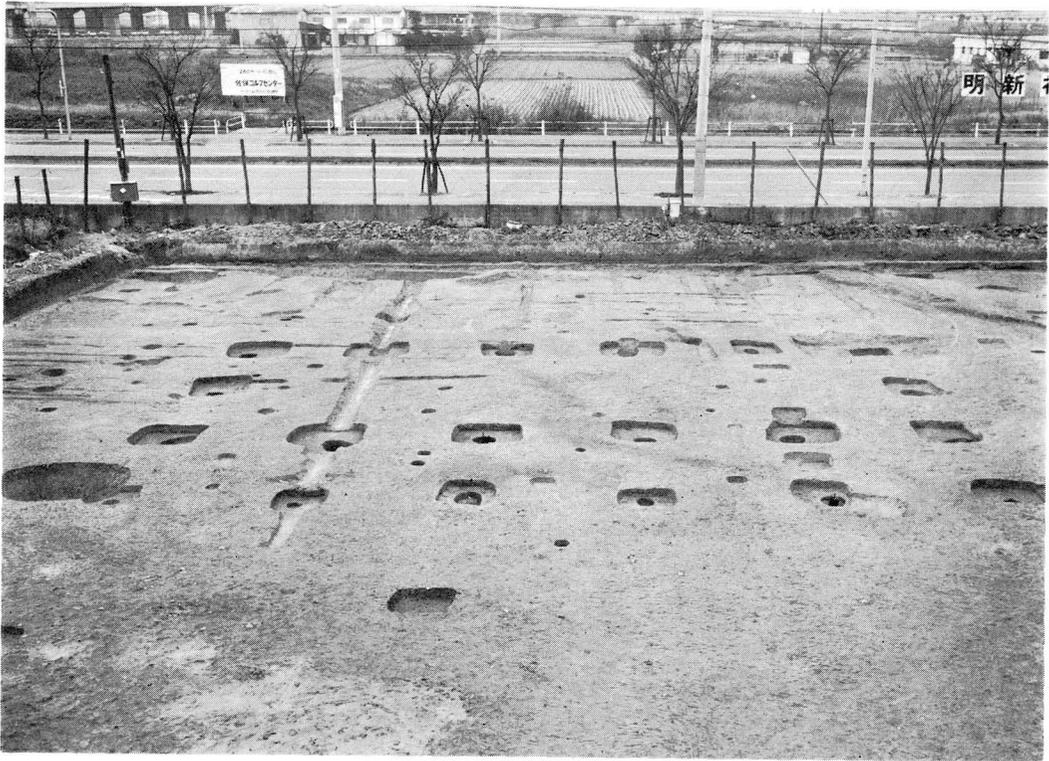
SD1552 (東から)



昭和52年度調査区全景（東から）



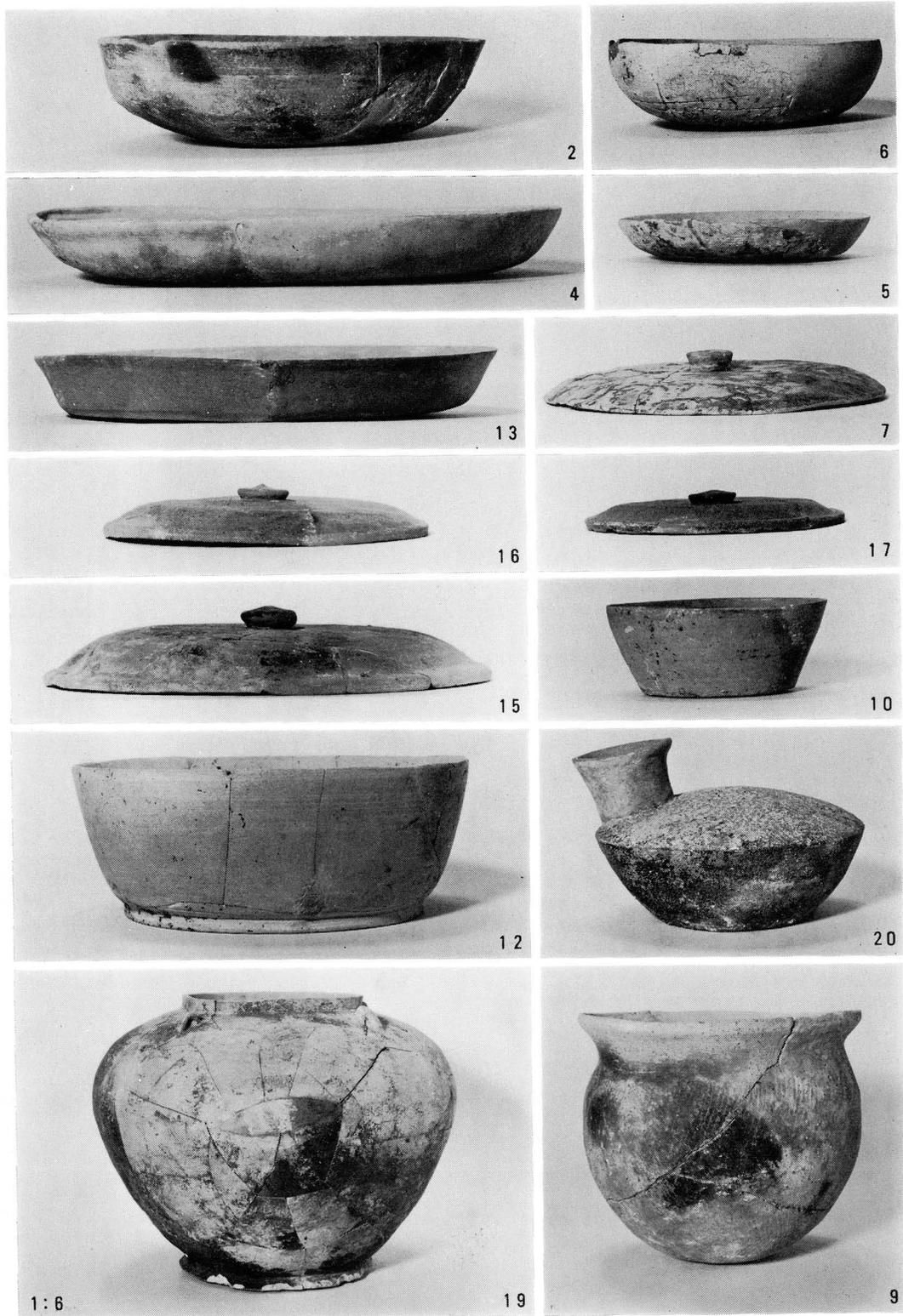
昭和52年度調査区全景（東から）



S B1570 (南から)



S B1574 (東から)





—



4



—



5



6



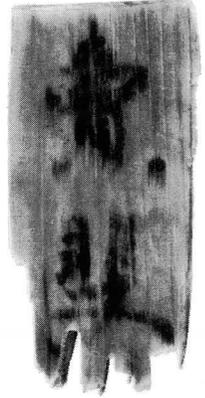
—



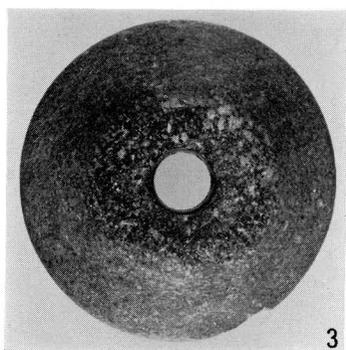
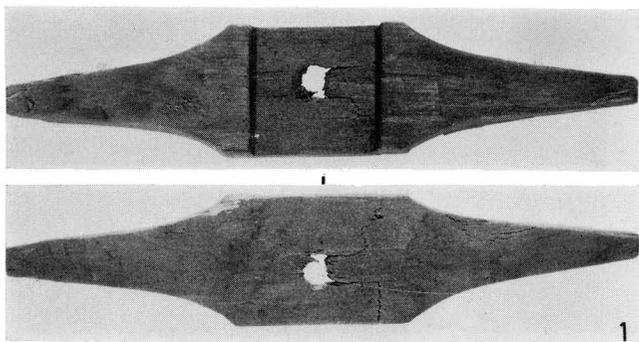
7



—



8



1. 糸 巻 (1 : 1)
2. 横 槌 (1 : 2)
3. 紡 錘 車 (1 : 1)
4. 用途不明
石 製 品 (1 : 2)

4

奈良市尼ヶ辻町

平城京左京三條二坊六坪発掘調査概報

昭和55年3月31日 発行

編集 奈良国立文化財研究所
平城宮跡発掘調査部

発行 奈良市教育委員会

印刷 共同精版印刷株式会社

